2020年8月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第523号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

河川書誌考ー里川

☆～～～～～～～～～～///

文・古賀 邦雄（古賀河川図書館）

日本の河川はいくつ流れているのだろう

日本では河川はどのくらい流れているのだろうか。日外アソシェーツ編・発行『河川名よみかた辞典』(1991) によれば、一級河川石狩川をはじめとして、約2万6000の河川が収録されている。同編・発行『河川大辞典』(1991) は同様に約2万6000の一級河川、二級河川、準用河川のくわしいデーターを網羅している。河川の通称、別称、古称、河川等級、上流端、下流端、併合、合流先と合流点、流出先と流出地点、水源地、河川延長、流域面積、所属水系が記されている。河川のルーツを調べるには村石利夫編・著『日本全河川ルーツ大辞典』(竹書房・1979) を引けばよい。常呂川はアイヌ語ト・コロ・ベツ (沼・持つ・川) から名づけられた。北海道の川はアイヌ語と密接に関係している。河川名はたんなる記号でなく歴史や文化を秘めている。

高橋裕編集委員長の『川の百科事典』(丸善・2009) は、各方面の専門家190名の執筆により、総論編 (川とは何か、世界の川、日本の川、都市と河川など)、各論編 (各河川を五十音に並べ、河川用語も解説)、付録には河川地図、河川年表、湖沼、ダムの一覧表を掲げる。

日本の川の特徴について、「きわめて多数の群小河川がひきしめあっており、急流が多く、洪水時には川の規模が小さいにもかかわらず、大量の洪水流量が発生する。氾濫原に人口と資産が集中している。流量の年間変動が大きくほとんどの河川は河川事業を実施してきたためきわめて人工的である」と論じる。

水資源開発公団 (現・水資源機構) の役割

私たちが生きていくために欠かせないものは、水と食糧とエネルギーの確保である。この三つは国の安全保障にも係わる。世界中で水戦争、食糧戦争、エネルギー戦争が起こっている。コロナ禍の世の中でも、この三つ確保は一番大切なことであるといえる。そのうち水は絶対に欠かせない。水から食糧・エネルギーの生産が可能であるからだ。

水は多すぎても、少なく過ぎても、私たちの生活や産業の活動に重大な影響を及ぼす。水害・渇水を減災するために、河川改修を行い、水資源開発施設であるダム・堰・水路の建設などによって、水を適量に調整し流すのが、治水と利水の役割である。

私は昭和42年水資源開発公団 (現・独立行政法人水資源機構) に入社し、日本の河川に関する治水と利水と環境に係わる仕事に従事してきた。水資源開発公団は利根川・荒川・豊川・木曽三川 (木曽川・長良川・揖斐川)・淀川・吉野川・筑後川の7大河川における水資源開発施設 (ダム・水路・河口堰) の築造とその管理を行う組織である。仕事柄と言え、昭和42年4月以降今日まで、水・河川・湖沼に関する書籍を収取してきた。

書籍は十進法によらずに、文学、紀行、歴史、水運、民俗、水車、地理、社会、生活、法律、経済、農業用水、環境、親水、公害、水資源、水道、工業用水、下水道、水力、森林、治水、水害、橋梁、地下水、水質、科学、生態、辞典、工事誌、児童書、外国の河川、海域に分類し、平成13年退職後、所蔵8500冊 (令和2年3月1万3000冊となる) をもって、筑後川沿いの福岡県久留米市に古賀河川図書館を開館し、河川関係者に対し、閲覧、貸出、レファレンスを行ってきた。

河川書の収集方法

私は転勤族である。木曽三川の揖斐川上流徳山ダム建設所の勤務では、昭和63年から5年ほど岐阜県揖斐郡揖斐川町で暮らした。その地方には、その地方にしか発行されてない河川書が多くみられる。休日には、愛知県、名古屋市、豊橋市、岐阜県、岐阜市、大垣市、三重県、桑名市、滋賀県、彦根市の図書館を廻り、図書館内の郷土資料室には必ず閲覧を欠かさなかった。またその土地の本屋、古本屋にも顔をだした。と同時に、木曽三川、矢作川、庄内川も巡り、これらに係わる治水、利水、水害等の河川書を購入した。特に郷土に係わる河川書を手に取ったときは、嬉しいものだ。

東京本社勤務の時は、JRお茶の水駅で下車して、坂道を下り、神田本屋街の三省堂、古本屋明倫館など、さらに地方・小出版流通センターへ出かけ、全国の河川書を購入できた。

その後の転勤先でも図書館を巡った。さらに退職後も一級河川109水系を踏査しているが、北海道から沖縄まで全国の図書館へ足を運び、郷土資料室で、その地方の河川書を調べ、購入を図ってきた。

地方の河川書ー里川

広辞苑には里山は表記されているが、まだ里川の言葉がない。前記の『河

川大辞典』には、実際里川という名の川は、茨城県久慈郡、三重県熊野市、滋賀県甲賀郡、京都府綴喜郡、和歌山県西牟婁郡、愛媛県西宇和郡、佐賀県伊万里市、長崎県北松浦郡に、8つ流れている。『日本全河川ルーツ辞典』によれば、茨木県久慈郡を流れる里川のルーツについて、「常陸風土記に薩川とでている。いくつもの里を縫って流れ下る川の意」と述べている。里とは人家のあるところ、すなわち集落といってよい。里川は集落を縫って流れ下る川である。

現に、里川という名のついた書として、井手彰著『里川を歩く』(風濤社・1998)があり、同著『休日、里川歩きのすすめ』(平凡社・2001)は、石神井川、白子川、不老川を歩いたエッセイである。川を歩いたとき、イメージが湧いてきた言葉が「里川」であったという。

鳥越晧之編『里川の可能性』(新曜社・2006)では、「日本列島の地図を広げてみると、川がまるで灌木の枝のように細かく分かれながら国土を流れているのがわかる。それが日本列島における河川の特徴である。実際はさらに、この細かな枝が毛細血管のように分かれており、どの地域に住んでいていても、近くに毛細血管にあたる複数の川や水路に出くわすことになる。わたしたちが里川と呼ぶ川は、この細かな枝や毛細血管のうち、身近に利用している水域を意味している。」このような里川は伝統的に、飲用、洗濯や農作物の洗い、水運、農工用、漁労、防災、遊び、景観に利用されてきた。

東京の里川を歩く

東京は水の都である。身近にいくつもの里川が流れている。陣内秀信編『水の東京』(岩波書店・1993)に、東京は水と共に生きる都市として発展してきた、とある。戦後、水の都の破壊と喪失を経験したが、その再生の兆しが見え始め、隅田川、臨海部、都心、下町、山の手における東京の水風景を描く。春のうららの隅田川は、「花」に歌われるように清流であった。幸田文著『ふるさと隅田川』(ちくま文庫・2001)よれば、人生の三度の転機に隅田川のほとりに住み、励まされ、癒されてきたという。ぼくのフナ釣りは父

春の小川でフナを釣る―田んぼと用水路と魚たちの今
大穂耕一郎著／まつやま書房刊
定価（本体1600円＋税）
ISBN 978-4-89623-016-1

東京の川を歩く　地図でたどる里川・用水・緑道
飯野頼治著／さきたま出版会刊
定価（本体2,800円＋税）
ISBN 978-4-87891-421-8

に教わったと始まる、大穂耕一郎著『春の小川でフナを釣る』(まつやま書房・2001)は、河川や水路で釣りをした体験がつづられている。

飯野頼治著『東京の川を歩く―地図でたどる里川・用水・緑道』(さきたま出版会・2015)は、秋川と平井川を始めとして、浅川とその支流、多摩川へそそぐ里川、新河岸川へそそぐ里川、玉川上水と用水、玉川上水の分水、石神井川と神田川、神田川支流(善福寺川など)、東京湾へそそぐ里川(渋谷川など)を踏査する。大河では荒川・利根川水系の都内を流れる部分をとらえている。また、田原光泰著『「春の小川」なぜ消えたか』(之潮・2011)は、東京都の発展に伴い渋谷川にみる都市河川の歴史を追っている。

全国の里川を追う

地域において日常の生活で利用されている川、愛されている川、生物の豊かな川、環境保全の活動がなされている川、その里川を書物で北から南へ追ってみる。

【北海道】

豊平川―札幌市教育委員会編『豊平川』(北海道新聞社・1978)

静内川―濱田良平著『静内川』(光村印刷・1994)

松倉川―函館・松倉川を考える会編『清流松倉川』(幻洋社・1997)

【東北】

埼玉の里川―都幾川の生きものたち
斉藤裕也・藤田宏之　共著
まつやま書房刊
定価（本体1800円＋税）
ISBN 978-4-89623-125-0

馬淵川―国香よう子著「馬渕川の旅」(熊谷印刷出版部・1985)

広瀬川―江刺節子ほか『sendai広瀬川ルネッサンス』(本の森・2005)

夏井川―吉田隆志編『夏井川流域紀行』(いわき地域学会出版部・1989)

【関東】

都幾川―斉藤裕也・藤岡宏之著『埼玉の里川　都幾川の生き物たち』(まつやま書房・2020)

養老川―地引春次著・発行『私たちの養老川』(1987)

和泉川―川とみず文化研究会編・発行『横浜ふるさと和泉川』(1993)

【東海】

瀬戸川―佐野藤雄著『瀬戸川っ子と青空先生』(静岡新聞社・1985)

柿田川―関野真紀子著・発行『柿田川』(1993)

【関西】

飛鳥川―松本清二編『オオムラサキがおしえてくれたこと』(信山社サイテック・2001)

加古川―柳澤忠著発行『加古川の流れ』(1980)

【中国】

高瀬川―『大梶七兵衛と高瀬川』(出雲市教育委員会・1987)

厚東川―宇部地方研究会編・発行『厚東川の果たした役割』(2002)

【四国】

肱川―横山昭一著『肱川―人と暮らし』(愛媛文化振興財団・1998)

江川―鴨島町教育委員会編・発行『名水百選の江川』(1986)

【九州】

堀川―桟比呂子著『運河堀川』(海鳥社・2019)

中島川―宮田安著『中島川遠眼鏡』(長崎文献社・1977)

甲突川―下堂園純治著『甲突川の詩』(南洲出版・1995)

以上、各地域における里川の書をいくつかあげてみた。これからも、里川を歩いて河川書を購入したいと思っている。今まで収集した河川書1万3000冊ほどは、2020年3月に筑後川沿いにある久留米大学御井図書館に寄贈搬入を終え、順次公開されることとなった。

＜笹舟を流して涼し里の川＞

（平田縫子）

＊

（こが　くにお・古賀河川図書館／2020年6月5日　記す）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

弊社のホームページでは半年前までの本誌バックナンバーをアップしております。
また「新刊ダイジェスト」のバックナンバーもたくさん掲載してます。
アドレスは下記の通りです。右記のＱＲコードもご利用ください。
URL：http://neil.chips.jp/chihosho/

『こども食堂便り　こどものなみだ －社会派絵本１』●山川貢 / 文・山花美游 / 絵

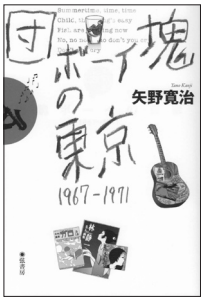
「朝ごはんどころか、前日の晩ごはんから食べてない。やっと給食の時間だけれど、親が給食費を払ってくれない」「家族だんらんを経験したことがない」「今年もお年玉をくれる人がいなかった。そもそもおじいちゃん、おばあちゃんに会ったことがない」と呟く子どもたち。子どもの約7人に1人が貧困という日本。その現状を各地での取材、ヒアリング調査に基づき、イラストでビジュアル化して14例を挙げる。

貧困には大きく分けて『絶対的貧困』と『相対的貧困』の二種類があり、前者は生きていくために必要な食糧や住居がなく医療も受けられない状態のことで、後者はその国の文化・生活水準と比較して貧困状態にあるとしたもの。後者において日本の子どもは先進国34か国中10番目に貧困率が高く、深刻な問題となっている。そんな状況を背景に地域住民や自治体が主体となり、無料または低料金で子どもたちに食事を提供する“子ども食堂”は今や全国に広がっている。前述の例は北海道苫小牧市でNPO法人の理事長を務め、子ども食堂を運営する著者が紹介した。

締めくくりは「この子にとってこの食堂での食事が生まれて初めての外食なんです」と笑顔の親子が描かれてもいるが、新型コロナウィルスの流行前からの現実なので、今はもっと過酷と言える。冒頭には政治を変えるしかないと決意する山本太郎氏の推薦文も掲載。子どもの未来を真剣に考えさせてくれる絵本。（Ｙ）

◆800円・Ａ５判・23頁・**井上出版企画**・群馬・202004刊・ISBN9784908907111

『団塊ボーイの東京　１９６７－１９７１』●矢野寛治著



通産官僚の覆面作家堺屋太一が、異常に膨らんだ1947年から49年生まれの子どもたちを、「将来においても数数の流行と需要を作り、過当競争と過剰施設とを残しつつ、年老いて行くことであろう」との予測から名付けた＜団塊の世代＞。まさにそのピークである48年に大分県中津市で生れ、18歳の春、大学進学のために東京に出て、大手広告会社に就職するまでの、「親の脛をかじって過ごした怠惰な学生の大学四年間のお話し」である。中津出身ということもあり、三田の大学以外は眼中になかったが不合格。浪人覚悟のところに、滑り止めの旧財閥系大学に拾われる。迷いながら向かった大学で、正門に犬の首輪で自分の首をつなぎ、ベトナム反戦、安保反対、無期限停学処分撤回のストライキをする長髪の学生に出くわす。目力の漲るその男と言葉を交わしたことで、入学を決意する。だからといって学生運動に身を投じたわけではない。母親との約束の毎月の手紙には、規則正しい生活で勉学に励んでいると嘘八百を並べ立てて金の無心をし、ＡＴＧ映画、紅テント、渋谷ジァンジァン、酒、麻雀、本、旅に明け暮れ、新宿歌舞伎町でカツアゲに遭い、挙句の果てに肺結核まで患う。

同世代の者として共感できることばかりではないが、＜団塊＞とは大きな塊ではなく、ニヒルなポーズをとり、クールに演じたパラパラの「断解」であるとの説には納得する。著者のその後の生き方も知りたいと思う。（飯澤文夫）

◆1800円・四六判・259頁・**弦書房**・福岡・202005刊・ISBN9784863292048

『増田今昔物語 －伝説と昔話』●黒沢せいこ著

秋田県横田市増田地区に残る伝説や昔話、歴史的エピソードを満載した昔語り集。著者は、第1回秋田県現代詩人賞なども受賞したことのある詩人であり、また、秋田に伝わる伝承の収集や採訪に力を注ぎまた語り伝える、語りの人でもある。これまで、増田に残る内蔵と呼ばれる土蔵を借り、幾度となく昔語りをしてきた。その集大成。

この内蔵と呼ばれる増田の土蔵は、外蔵や店蔵と違って家の奥にあって、表通りからは窺い知ることができないようになっているという。この内蔵について語る「ほたるまちの由来」を読んでみると、その造りの特徴が、この地の人々の気質を映し出したものであるということがわかる。すなわち、増田の人たちは昔から資産を自慢するよりも、むしろ裕福さを隠す傾向にあり、家の建物も店構えも質素にして、家の奥にあって外からは見えない内蔵や裏庭を豪華にしていた、と。それは身なりや服装にも言えることであり、資産家や大店の主人であろうと同じであった。しかし、明治維新後は、表向きも堂々とした構えの建物が盛んに建てられるようになった、という。

他に、源頼朝との戦に破れた平泉藤原氏残党の落人伝説『馬鞍と落人（胆沢）』や、増田の満福寺を開山した梅栄和尚の杖から芽が伸びたとされる梅栄桜の有為転変の物語『梅栄桜の由来（満福寺）』等、増田に特有な伝説や歴史、あるいは、他地域でも見られる型を持ちながらこの地に土着したとみられる昔話の数々を収録している。（N）

◆1500円・A5判・129頁・**イズミヤ出版**・秋田・202005刊・ISBN9784904374399

『眉の清（ちゅ）らさぞ神の島 －上野英信の沖縄』●三木健著

筑豊の地底の坑夫たちをテーマにした記録文学で、近代日本の在り様を鋭く撃ち続け告発してきた上野英信。いま改めて見直され、ここ数年も上野英信展が各地で開かれている。その上野の遺作とも呼べるものが、沖縄を正面から取りあげた異色の作品『眉屋私記（まゆやしき）』である。「移民と辻売りという近代沖縄の底辺を貫く二つのテーマによって、そこに息づく民衆の姿を映しだしたのである。……それも顔の見えない民衆像ではなく、名前を持った一人ひとりの人間を通して描き出された。眉屋一族の歴史は、近代の沖縄民衆の体験であり、歴史であった」（本書より）

その上野英信の没後33回忌にあたり、眉屋一族生誕の地・沖縄名護の屋部（やぶ）地区に『眉屋私記』の文学記念碑が今年秋に建立されることになった。その実行委員でもあり、上野が『眉屋私記』を著わすきっかけを作り、取材・執筆に全面的に協力した元琉球新報記者の著者が、それを機にこれまで書き連ねてきた上野英信と沖縄、そして『眉屋私記』に関する文章を集めて手直しし新たに編んだのが、もう一つの記念碑（紙碑）とも言えるこの一冊である。「地下水脈のように読み継がれた『眉屋私記』が再び地表にその姿を見せた」（本書より）――あの上野英信は今でも沖縄・屋部に生きている！　上野英信の『眉屋私記』執筆の貴重なテキストである「山入端（やまのは）萬栄キューバ手記」の全文も、今回初めて収録されている。（二）

◆1800円・四六判・208頁・**一葉社**・東京・202008刊・ISBN9784871960809

『帝国日本における越境・断絶・残像　人の移動』●植野弘子・上水流久彦編

近代において日本は海外への膨張を続けていきました。台湾から朝鮮・中国から果ては南洋まで広がり、その過程で多くの人の移動が起こりました。本書はそうした日本の支配下での人の移動に注目します。日本人の海外進出という点では、朝鮮や台湾に渡った学者の「異国」を見るまなざしを論じた論文があります。しかしそれだけではありません。今ではなかなかイメージできないような人の流れも発生していました。冨田哲「韓国華僑と台湾」では中国山東省から朝鮮半島に渡り、韓国に暮らすことになった中国系の人びとの戦後が、インタビューなどを交えて記録されています。冷戦下韓国と国交のなかった中華人民共和国は帰国先たりえず、多くが台湾へ進学しそこに定住することもありました。韓国華僑の韓国や台湾そして中国それぞれへの思い、世代ごとの意識の変化などを垣間見ることができます。松田良孝「沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在」では台湾と宮古島の間の人の移動について取り上げます。台湾に隣接する八重山ではパイン産業と台湾が結びついていますが、宮古島においては台湾系の人々の記憶は一見するとさほど残されていません。そこを著者は聞き書きなどで丹念に掘り起こしていきます。文献調査だけでなくフィールドワークを重ねたアプローチが本書の特色です。こうした日本の支配下とその後を生きた東アジアの人々の力強さやしたたかさはとりわけ印象に残ります。（副隊長）

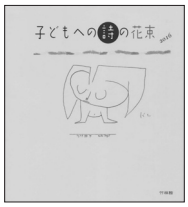
◆3000円・四六判・272頁・**風響社**・東京・202002刊・ISBN9784894892736

売行良好書

期間：2020年6月15日～7月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

(1)『子どもへの詩の花束』1800円・竹林館　(2)『疫神病除の護符に描かれた元三大師良源』900円・サンライズ出版　(3)『本の雑誌の坪内祐三』2700円・本の雑誌社　(4)『たぷの里』1200円・ナナロク社　(5)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(6)『新型コロナウイルスと闘った、韓国・大邱の医療従事者たち』1800円・クオン　(7)『維新の残り火・近代の原風景』1800円・弦書房　(8)『荘直温伝』3000円・吉備人出版　(9)『米寿を過ぎて長い旅』1800円・海風社　(10)『夏がとまらない』1000円・ナナロク社　(11)『占領と引揚げの肖像・ＢＥＰＰＵ１９４５－１９５６』2200円・弦書房　(12)『旅をする本』1600円・ラグーナ出版　(13)『フィールド版　日本の海岸植物図鑑』2600円・トンボ出版



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］

(1)『本の雑誌の坪内祐三』2700円・本の雑誌社　(2)『疫神病除の護符に描かれた元三大師良源』900円・サンライズ出版　(3)『本の雑誌　４４６号』800円・本の雑誌社　(4)『昭和プロレスマガジン　５２』909円・昭和プロレス研究室　(5)『東京かわら版　７月号』545円・東京かわら版　(6)『香港のてざわり』1400円・本の雑誌社　(7)『本を売る技術』1600円・本の雑誌社　(8)『千夜曳獏』1800円・青磁社　(9)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(10)『ＤＣプランナー２級合格対策問題集　２０２０年度版』2700円・経営企画出版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『調査されるという迷惑』1000円・みずのわ出版　(2)『東京の森のカフェ』1300円・書肆侃侃房　(3)『未知なる知者よ』1500円・海風社　(4)『廃寺のみ仏たちは、今　奈良県東部編』950円・京阪奈情報教育出版　(5)『維新の残り火円・1,800　(6)『消えた映画館を探して』1800円・吉備人出版　(7)『北海道いい旅研究室１７』773円・海豹舎　(8)『小沢一郎　闘いの５０年』1800円・岩手日報社　(9)『出雲王国とヤマト政権』2250円・大元出版　(10)『不明の花』1500円・海風社　(11)『愛の詩集』1500円・海風社　(12)『荘直温伝』3000円・吉備人出版　(13)『絶滅の危機にある　しずおか野生生物図鑑』1364円・羽衣出版

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

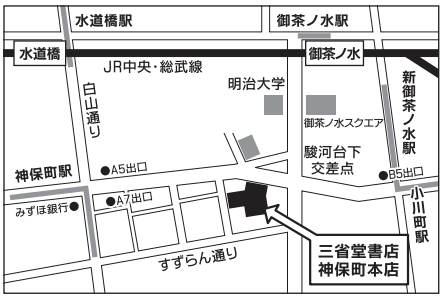
トピックス ―― ★★★

▼この７月、西日本各地で水害が発生いたしました。被災された方々にお見舞い申し上げます。この水害ということに関連してのことですが、ミツカングループが発行している『水の文化』という機関誌の62号（特集・再考防災文化）に、今号１面にご寄稿いただいた古賀河川図書館の古賀邦雄さんの「水の文化誌52・日本の水害とその減災を考える」という連載記事が掲載されています。ここでは「明治期～平成期までの150年間にわたる水害を追求し、その減災について文献を通じて、考えてみる」という趣旨で、各時代の水害に関する実に多彩な書籍が網羅されています。中にある「災害伝承」に関する一節を紹介させいただきます。

＜古代から全国的に災害は起こっているが、その地域には必ず先人たちが災害に関する警鐘を鳴らしている。災害は繰り返し起こることから水害碑をつくり、その教訓を後世に遺している。高橋和雄編著『災害伝承－命を守る地域の知恵』（古今書院2014年刊）では、2011年３月の東日本大震災で過去に発生した津波の災害伝承が継承されている地域では人的被害が少なかったという。災害対策基本法に災害教訓の継承が明記されるとともに、防災教育が努力義務化された。この書では、災害古文書、災害の石碑、災害遺構の保存を指摘する。避難するところを決めて、災害が起こったら、個人でてんでばらばらに逃げるが一番である。＞

※『災害伝承－命を守る地域の知恵』は当センターでは取り扱っておりません。

※機関誌『水の文化』は、web上で公開されており、だれでもダウンロードして読むことができます。
http://www.mizu.gr.jp/kikanshi/

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

三省堂書店
BOOKS SANSEIDO
営業のごあんない
神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp
本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。